

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	1 年 1・2・3 類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
*****		「天理教教典」	「おてふり概要」「教祖冊子」

科目の到達目標
◎「天理教教典」第1章から第5章を通して、「天理教教義」の筋道を学び、教祖によって明らかにされた親神様の思召しを正しく理解する。第1章で教祖のお立場を正しく認識し、第2章で教祖によってお教え下された人類救済の方法である、「つとめ」と「さづけ」について学ぶ。第3章で第1章、第2章の元となる人間創造の根源たる「元の理」を理解し、第4章で人間創造の神である「天理王命」の人間世界に対する守護と親心を学ぶ。さらに第5章で教祖の「ひながた」こそ、教えの理想であることを認識する。
◎「みかぐらうた」第1節から第4節と、第5節のうち1下り目から6下り目の「おてふり」を習得する。

評価の観点と方法について
◎「天理教教典」を通して学んだ教えの筋道が、正しく理解できているか、教義（教理）の知識面を確認するとともに、教えを基にして物事を考え、日常生活の場で教えが実践できるかどうか確認。
◎「おてふり」は各下り毎にテストを行い、教祖よりお教え頂いた「つとめ」を素直に、真剣にかつ綺麗につとめる努力ができることを確認する。
◎学期末考査《70点》と平常点（おてふりテスト・ノート、課題提出・授業中の態度等）《30点》により総合的に評価

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	*天理教の概説 ▼座りづとめ ▼よろづよ八首	*なぜ教義の授業を学ぶのか *本教の簡単な概説 ▼「つとめ」の重要性の認識 ▼基本の手・足の運び、地歌	*生きる目的（人生の意義） *親神様・教祖・立教・三原典などについての説明 ▼第1節から第3節までのお手振りを正確につとめる ▼繰り返し練習（正しい手振りと足の運び）《鳴り物を含む》 3～4時間（テスト含む）	▼「つとめ」に対する姿勢（地歌） ▼正しい手振りと足の運び・地歌
	5	*天理教教典について *教典第1章 「おやさま」	*教典の位置付け *教祖＝「月日のやしろ」である 教祖よりお教え下さる教えの目的と親心	*教典制定の経緯、三原典、前篇・後篇について *最初の啓示の理解（「おふでさき」1～3首） 「おふでさき」でお示し下さる「月日のやしろ」を正しく認識 教祖の親心の具体的内容（口・筆・自由自在の守護・身を以て行いに示す） 「神・月日・をや」「教祖存命の理」 *教祖冊子を用いて補足説明する	*「元の神」「実の神」 「月日のやしろ」 「おふでさき」（たとえ） *自分にとって「教祖」とは
	6	▼おてふり 「1下り目」	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し、繰り返し練習《鳴り物を含む》→3～4時間（テスト含む）	▼正しい手振りと足の運び・地歌
	7				

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	*教典第2章 「たすけ一条の道」	▼おてふり 「2下り目」	*人類救済の具体的方法である「つとめ」について学ぶ *人類救済の具体的方法である「さづけ」について学ぶ	*「つとめ」の意義 「つとめ」の呼称 *自分の「つとめ」に対する姿を確認 *「さづけの理」の意義 「よふばく」の使命
	10	*教典第3章 「元の理」	▼おてふり 「3下り目」	▼正しい手振りと足の運び *「立教の3大いんねん」「つとめの理」が如何なる理に基づくのかを明らかにする ▼正しい手振りと足の運び	▼正しい手振りと足の運び・地歌 *「元の理」=象徴的説話 (たすけの理話) 「立教の3大いんねん」 「つとめ」=人間創造を今に再現するもの→守護
	11		▼おてふり 「4下り目」	▼正しい手振りと足の運び	▼正しい手振りと足の運び・地歌 *「いれつきょうだい」 「成人」=「たすけ」・「陽気ぐらし」 「だめの教え」
	12				▼正しい手振りと足の運び・地歌
三 学 期	1	*教典第4章 「天理王命」	▼おてふり 「5下り目」	*親神様の守護(十全の守護)と親心 ▼正しい手振りと足の運び *「天理王命・教祖・おははその理一つである」	*「元の神」・「実の神」 「十全の守護」を実感する→ 親神様の御守護 ▼正しい手振りと足の運び・地歌 *親神様の親心の認識
	2		▼おてふり 「6下り目」	▼正しい手振りと足の運び	▼正しい手振りと足の運び・地歌
	3	*教典第5章 「ひながた」		*「ひながた」の理解	*「ひながた」の事実 「世界たすけ」の親心

その他 (履修上の留意点)

◎「天理教教典」をよく拝読し、毎時間ノートを必ずとること。(素直な心で、真剣に学ぶ)

「おてふり」は、「みかぐらうた」を歌って、陽気な心で勇んで練習させて頂きたい。

3類については、その習熟度を確認しながら進め、「おてふり」に慣れることを授業の柱としたい。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教義	2	2年1・2・3類	必修
授業担当者		教科書名	副教材等
*****		天理教教典・おふでさき	おてふり概要

科目の到達目標 教典（1学期・2学期）、おてふり（1学期・2学期）、おふでさき（2・3学期）、おさしづ（3学期）			
○天理教教典	後篇（第6章～10章）に示された教えの正しい理解を進めると共に、その教えを如何に個々の生活に現し、そこから生まれる喜びを他の人々に伝えていくことの大切さを学ぶ。		
○おてふり	7下り目から12下り目の地歌を唱えることの努力を求め、繰り返し“てなをし”することで、各下りの習得を目指す。		
○おふでさき	「第一号」を中心に学び、それに親しむことに重点を置き、その学び方の注意点を確認する。		
○おさしづ	日常の生活に関わりのある内容のものをテーマとして与えながら（各担当者一任）、プリントを中心に「おさしづ」に親しみを持たせる。		

評価の観点と方法について			
○天理教教典	「てびき」「節（身上・事情）」「かしの・かりもの」「ほこり」「いんねん」「たんのう」「ひのきしん」「誠真実」「よふばく」「別席」「さづけ」「教会」「陽気ぐらし」について正しい理解が出来ているかどうか。		
○おてふり	各下り（7～12下り）の地歌の暗唱と、“手振り”“足の運び”が身についているかどうか。努力しているかどうか。		
○おふでさき	「おふでさき」の概説、各お歌の正しい読み方と語句の意味、そして第1号冒頭や「みち」「ほこり」「水」にたとえられたおふでさきについて理解出来ているかどうか。		
《学期末考査（70点）と平常点（30点：おてふりのテスト、ノート、課題の提出、「お誓いの言葉」、授業態度）により総合的に評価する》			

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一学期	4	教典／前篇（1～5章）	1年次分を振り返り、2年次で学ぶ範囲を改めて確認する。	第1章から5章までは教義篇と呼ばれ、教義の粗筋が記されているのに対し、第6章から10章は信仰する者の教えの悟り方、通り方について勉強することを確認させる。	第1章から5章までの基本的な内容をどの程度理解出来ているか。
	5	▼おてふり よろづよ八首	▼どの程度正確に習得出来ているか。	▼一人でも振れる生徒は一人で、振れない生徒は補助をつけて行う。	▼正確に、或いは補助を頼りながらも振ることができれば可。
		第6章 てびき	全く本教と縁のなかった者が如何にして導かれ入信するのか。	自分の家の信仰の元一日を振り返り、それを通して「節（身上・事情）」「親心」ということについて考える。	「節」「親心」ということに対する受け止め方が理解出来ているかどうか。
		▼おてふり 6下り目	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に八ッ、九ッ）
		第7章 かしの かりもの	身上「かりもの」の理を思い「ほこり」を払い、「いんねん」を悟り、その納消の為に親神様に凭れて通ることの大切さ。	日々の生活を元気に通らせて頂いていることから、身上「かしの・かりもの」について触れ、心一つが我がの理ということから「ほこり（八つのほこり）」へ、そして「出直」へと発展させる。「いんねん」についての簡単な説明。	「かしの・かりもの」の理と「出直」ということに対する理解。八つのほこりを覚える。
		▼おてふり 7下り目	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に三ッ、九ッ）
一学期	6	第8章 道すがら	成人の道への歩み方特に「たんのう」「ひのきしん」「誠真実」について学ぶ	身上・事情の受け止め方（たんのう）と、信仰の喜びの行動化（ひのきしん）について「みかぐらうた」（5カ所）から学び、そこから生まれる「誠真実」についても触れる。	「たんのう」「誠真実」「ひのきしん」について説明出来ること。
	7月	▼おてふり 8下り目	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に一ッ、二ッ、三ッ、四ッ、六ッ、九ッ、十）

二 学 期	9	第9章 よふぼく	これから迎える「よふぼく」としての自覚と心構え。	来年2月から初席（別席）を運ぶということから、入信し、「別席」を運び「よふぼく」（おさづけ）・「教人」「教会長」となり、名称の理をいただくまでの過程に触れ、「よふぼく」とは、という事や、所属する教会の事、布教についても考えを広げたい。	「別席」について説明が出来ること。「さづけの理」「教会名称の理」についての理解。
	10	第10章 陽気ぐらし ▼おてふり 9下り目	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に五ッ、七ッ）
		「おふでさき」概説 「おふでさき」第1号（1～20、21～28、29～50）	人生究極の目的である「陽気ぐらし」とはどのような世界をいうのか。教典のまとめを確認する	現代社会の様々な出来事から親神様が共に楽しみたいと思われた「陽気ぐらし」を考え、心の在り方（ひながた）、「一手一つ」ということ、「心のきりなしふしん」の大切さを学ぶ。	真の「陽気ぐらし」ということへの理解。P98L3～P100L5を熟読し、2年間かけて学んできた事が理解出来ているかどうか。
		▼おてふり 10下り目	▼正しい手振りと足の運び	▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に一ッ、二ッ、十）
	11	「おふでさき」第1号（51～57、58～74） ▼おてふり 11下り目	「おふでさき」とはということの理解 ▼正しい手振りと足の運び	「おふでさき」を引用し、「おふでさき」の位置、定義（執筆の期間・教祖の直筆、和歌体）について正しく学ぶ。表記・読み方についても確認する。 ▼繰り返し練習（鳴り物含む） 3～4時間実施（テスト含む）	「おふでさき」とはということについて正しく説明出来るか。 ▼地歌暗唱の努力。正しい手振りと足の運び（特に一ッ、二ッ、十）
	12		各お歌の正しい読み方と、意味の理解。そして、「おふでさき」の正しい学び方（中心的話題を主としながら）。	第1号をその内容（話題）に従い、大きく5つに区分し、各歌を正しく読み、意味を理解しながらも、それぞれの話題（立教の意義・「つとめ」と布教伝道・やしきのそふぢ）について確認していく。	1～20の「立教の意義とつとめ」についての理解。29～50の“やしきのそふぢ（史実）”についての理解と、お歌の正しい読み方の確認。
三 学 期	1	「おさしづ」（概説） ▼おてふり 12下り目 「おさしづ」（内容理解）	各お歌の正しい読み方と、意味の理解。そして、「おふでさき」の正しい学び方（中心的話題を主としながら）。	29～50で話題となった“やしきのそふぢ”に続いての話題となっている58～74（秀司様のご結婚）について確認し、それを積極的に推し進められた教祖の思召を理解する。（正しい読み方と歌の意味の理解も含む）	58～74に示された史実の確認と、その事に対する教祖の思召をしっかりと理解出来ているか。お歌の正しい読み方の確認。
	2		れば、「おふでさき」の中 「おさしづ」についての理解。 日常生活でも活かせることの出来る「おさしづ」の内容理解を求める。	にある内容理解の難しいお歌について解 教祖と本席様（お立場について）からの「おさしづ」が筆録された期間。また、“刻限のさしづ”と“伺いのさしづ”についての確認。 テーマに沿った「おさしづ」を各担当が選びまとめ、そのプリントに従いながら内容理解と実践を促す。	説する。》 「おさしづ」について正しく説明出来るか プリントで示された「おさしづ」の内容理解が正しくできているかどうか。

その他（履修上の留意点など）

○3類の「おてふり」については習熟度を確認しながら進め、12下り目まで終わらすことのみに力点を置かず、出来ない箇所（下り）を教祖から教えられた通りに“手振り”“足を運ぶ”ことを年間活動の柱としたい。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	3年 1・3類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
*****		稿本天理教教祖伝	稿本天理教教祖伝逸話篇

科目の到達目標
「稿本天理教教祖伝」を拝読してこれを学ぶことにより、「月日のやしろ」である教祖が50年にわたり身をもってお示し下された「ひながた」に接し、世界一れつの人間をたすける為におかけ下さる教祖の「親心」を認識する。さらにその「ひながた」を私たち人間一人一人が日々迎えることこそ、本教信仰の目標であり「陽気ぐらし世界」の実現に向かう道であることを学ぶ。
(但し、第8章については内容が「おふでさき」の事についてであり、2年次に授業を行ったものとして省略する。)

評価の観点と方法について
教祖がお通り下され、お示し下された「ひながた」をただ史実として理解するのではなく、その「ひながた」を通して世界たすけの実現を思召される教祖の親心を感じる。さらに、「ひながた」を日々の生活の中で如何にして実践することができるかを考える。
学期末考査《70点》と平常点（ノート・夏期課題などの提出物、授業中の態度等）《30点》により総合的に評価する。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一学期	4	*「教祖傳」の概説 *第1章「月日のやしろ」 ・立教に至るまで ・最初の啓示	*「教祖傳」を学ぶ上での態度。 *教祖が「月日のやしろ」になられた経緯を学び、教祖のお立場を明確に理解せる。 ・啓示の内容を理解する。	*「ひながた」の意味。“稿本はしがき”の説明や全体の流れ。 *天保8年からの中山家における出来事。(中山家の家系など) ・親神様のお言葉(啓示)の解説。(1年次の復習も含む)	*「ひながた」を迎えることの重要性 ・啓示の意味と親神様の働き ・親神様の思いに添い切ること
	5	・立教 ・教祖のお立場 *第2章「生い立ち」 ・ご幼少のころ ・中山家への引き寄せ(ご入嫁)	・立教のひながた的意味合い。 ・「月日のやしろ」の理解。 *天保9年以前の教祖の歩まれた道すがらを学ぶ。 ・立教へ向かう親神様のお働き。	・「おふでさき」の解説と「ひながたの親」について。 *「魂のいんねん」ある教祖がお通り下された、立教までの道すがらを学ぶ。 ・「魂のいんねん」ある教祖が「やしきのいんねん」ある元の屋敷へと引き寄せられた。	・「月日のやしろ」の理解 *人間中山みき様の道すがらである。 ・「立教の3大いんねん」の確認。
	6	*第3章「みちすがら」 ・「貧に落ち切れ」 ・嘉永6年 ・をびやゆるし ・貧の谷底 ・たすけの道明け	*天保9年の立教から、教祖が先ずなされた事は何か。そこから元治元年までの約25年間の教祖の道すがらを学び、教祖が「月日のやしろ」であることを、再度明確にする。 ・後の高弟達の入信とさづけ。	・陽気ぐらしの意味を理解する。「物」→「心」 ・「世界たすけ」の門出の年。「おやしき」の3つのできごと。 ・人間創造の親としての「たすけ」である。 ・「貧に落ち切った」ところに、初めて見えてくる親神様のご守護。 ・親神様によるお引き寄せ。素直な信仰心。「さづけ」→「道の路金」	*天保9年以降の教祖のみちすがらを「ひながた」という。 ・「心の明るさ」＝「陽気ぐらし」 ・親神様にもたれ切る心。 ・「貧に落ち切れ」の意味の確認。
	7	*第4章「つとめ場所」 ・つとめ場所のふしん ・大和神社のふし ・反対攻撃と邪説	*つとめ場所のふしんを通して、本教のふしんの在り方を学ぶ。 ・「ふし」の意味を確認する。 ・「ぢばの理」(教えの根本)	*飯降伊蔵様の入信(「大工が出てくる、――。」)→ご守護に対する喜び、お礼の心(心のふしん)→つとめ場所のふしん(形のふしん) ・「ふしん」による勇んだ心→教祖のお言葉を素直に通る→「ふし」に直面→「神一条の精神」(ひのきしん)→「ふしん」の完成(心のふしん) ・「助道事件」に対する教祖のご態度→内に対する厳しいお姿。	*「ふしん」の意味と「つとめ場所」の意義。 ・「ひのきしん」の態度 ・「ぢばの理」の確認。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	*第5章「たすけづとめ」 ・つとめの理	*「みかぐらうた」の特色や作成の背景を学び、「つとめの理」を明確に理解する。	*「かぐら」と「てをどり」にこもる教祖の思い。 ・「理の歌や」「理を振るのや」	*「つとめ」の意味と教祖の思い。 ・「元の理」の理解。
	10	*第6章「ちば定め」 ・おふでさきご執筆 ・つとめの急込み ・高山たすけ ・「月日」の働き ・ちば定め ・つとめ人衆への仕込み ・いちれつきようだい	*「おふでさき」の台となっている出来事を辿り、「つとめ」と関連していることを知る。また、高山たすけを宣言され、その第1歩を踏み出されたのが教祖自身であった事を確認 ・世界たすけの実現に欠くことの出来ない「元のちば」である。 ・どこまでも神一条であること。 ・人間創造の親である親神様の思召	*「みかぐらうた」ご作成年代と、「おふでさき」ご執筆年代。 ・秀司様の結婚→「つとめ人衆」の引き寄せ・神一条の心。 ・「かぐらづとめ」の支度→「かんろだいの雛型」、「かぐら面」 ・「大和神社のふし」、「山村御殿のふし」→「奈良中教院」から呼び出し ・「赤衣」、「証拠守り」、「さづけ」→世界たすけの実現へ。 ・「ちば定め」の方法・・教祖よりお言葉を頂く→人々が素直にそのまま実行→人間創造の「元のちば」をお教え頂く。 ・こかん様の出直し→人間思案の心 ・「いちれつきようだい」、「かしの・かりもの」	*「おふでさき」を誌される親心と、「つとめ」によるたすけの実現。 ・1日も早く世界たすけを待ち望まれる思い。 ・今現在の教祖のご守護を確認。 ・教祖を信じて通ることがたすけの元であること。 ・親神様の思召しが何であるのか。 ・「かしの・かりもの」の自覚。
	11	*第7章「ふしから芽が出る」 ・「講を結べ」 ・転輪王講社 ・かんろだいの石普請	*教祖が求められた「講」と、秀司様が結講した「転輪王講社」との違いはどこにあるのか。かんろだいの石普請と、その頓座の意味を知る。	*「ふしから芽が出る」と仰せられる意味。(当時のおやしきの様子から) ・「講」＝信仰する者が、お互いの心をつなげて更に信心を深めるもの。 ・「陽気ぐらう世界実現」を目指される教祖の思召し。	*「ふし」＝より一層成人した姿へとお導き下さるもの。 ・「ふしん」の意味。
	12	*第9章「御苦労」 ・かんろだいの石取り払い ・毎日つとめ ・雨をづとめ ・教会公認運動 ・最後の御苦労	*「御苦労」を通して教祖が先頭に立って「つとめ」を急込まれた反面、御高齡の教祖を思う一念から応法の道(教会公認)を急ぐ子供達の姿を知る。	*当時の歴史的状況(明治政府の宗教政策)にも言及して、教祖の御苦労を間近に道を歩まれた側近の方々の苦悩と、人々を神一条の心へとお導き下さる教祖の親心。 ・親神様の自由自在のご守護→「雨降るも神、降らぬも神の自由」 ・神道本局へ提出した「5箇条の御請書」←「ひながたの道を通らねばひながた要らん」	*どこまでも神一条の心を求められる教祖→たすけの実現 ・神一条の心→人間思案の姿を一掃 ・「つとめ」＝よろづたすけ ・明治政府の宗教政策の理解。 ・教祖の親心(世界いちれつの親)
三 学 期	1	*第10章「扉ひらいて」 ・世界の動くしるし ・「月日」がありてこの世界あり ・「扉ひらいて」 ・教祖存命の理 *三年間のまとめ	・「ひながたの親」の確認 *ご自身の身上にしるしを見せて「つとめ」を急込まれる教祖の「おさしづ」を通して、当時の人々が命懸けの「つとめ」にとりかかった、明治20年陰暦正月26日を考える。 *卒業する生徒たちへよふぼくとしてこれだけは心に持っていてほしい心構え等、三年間で学ばせていただいた教えをもう一度振り返る	*刻々とお出し下さる「おさしづ」によって伝えられる「親の思い」に、何とかお応えしたいと思う反面、教祖のお身上を気遣う人々の思い。 ・「律ありても心定めが第一やで」→「つとめ」を実施。 ・親の思いに添い切る(神一条の心)→世界たすけの働きが始まる。 ・「つとめ」と「さづけ」によるたすけの実現。 *おさづけの理拝戴後の心構えやおさづけの取次ぎ、また人々をたすけることの実践の促し等。 三年間教義を学んでこれだけは覚えてほしい事を復習する。	*教祖のお身上＝「つとめ」の急込み→教祖の御苦労 ・世界の成り立ちの順序 ・「子供可愛い故」(親心) ・「教祖存命の理」の認識 *人をたすけることの実践や決意表明。
	2				

その他 (履修上の留意点)

教祖の「ひながた」こそ、この教えを信仰する者の歩むべき道である。従って、私たちは常に教祖と身近に接して日々を通して頂かねばならない。将来の「ようぼく」として一歩でも教祖のお心に近づくことができるよう、そして「ひながた」を実践出来るよう心掛けてもらいたい。

授業にグループワークを取り入れ、日常生活に教えを活かす契機になるよう進める。

科目名	単位数	指導学年・類・型	必修・選択
教 義	2	3年 2類	必 修
授業担当者		教科書名	副教材等
*****		稿本天理教教祖伝	稿本天理教教祖伝逸話篇

科目の到達目標
「稿本天理教教祖伝」を拝読してこれを学ぶことにより、「月日のやしろ」である教祖が50年にわたり身をもってお示し下された「ひながた」に接し、世界一れつの人間をたすける為におかけ下さる教祖の「親心」を認識する。さらにその「ひながた」を私たち人間一人一人が日々迎えることこそ、本教信仰の目標であり「陽気ぐらし世界」の実現に向かう道であることを学ぶ。
(但し、第8章については内容が「おふでさき」の事についてであり、2年次に行ったものとして省略する。)

評価の観点と方法について
教祖がお通り下され、お示し下された「ひながた」をただ史実として理解するのではなく、その「ひながた」を通して世界たすけの実現を思召される教祖の親心を感じる。さらに、「ひながた」を日々の生活の中で如何にして実践することが出来るかを、自分自身の事としてとらえ考えること。
学期末考査《70点》と平常点（ノート・夏期課題などの提出物、授業中の態度等）《30点》により総合的に評価する。

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
一 学 期	4	*「教祖傳」の概説 *第1章「月日のやしろ」 ・立教に至るまで ・最初の啓示	*「教祖傳」を学ぶ上での態度。 *教祖が「月日のやしろ」になられた経緯を学び、教祖のお立場を明確に理解せる。 ・啓示の内容を理解する。	*「ひながた」の意味。“稿本はしがき”の説明や全体の流れ。 *天保8年からの中山家における出来事。(中山家の家系など) ・親神様のお言葉(啓示)の解説。(1年次の復習も含む)	*「ひながた」を迎えることの重要性 ・啓示の意味と親神様の働き ・親神様の思いに添い切ること
	5	・立教 ・教祖のお立場 *第2章「生い立ち」 ・ご幼少のころ ・中山家への引き寄せ(ご入嫁) *第3章「みちすがら」 ・「貧に落ち切れ」	・立教のひながた的意味合い。 ・「月日のやしろ」の理解。 *天保9年以前の教祖の歩まれた道すがらを学ぶ。 ・立教へ向かう親神様のお働き。 *天保9年の立教から、教祖が先ずなされた事は何か。そこから元治元年までの約25年間の教祖の道すがらを学び、教祖が「月日のやしろ」であることを、再度明確にする。 ・後の高弟達の入信とさづけ。	・「おふでさき」の解説と「ひながたの親」について。 *「魂のいんねん」ある教祖がお通り下された、立教までの道すがらを学ぶ。 ・「魂のいんねん」ある教祖が「やしきのいんねん」ある元の屋敷へと引き寄せられた。 ・陽気ぐらしの意味を理解する。「物」→「心」 ・「世界たすけ」の門出の年。「おやしき」の3つのできごと。	・「月日のやしろ」の理解 *人間中山みき様の道すがらである。 ・「立教の3大いんねん」の確認。 *天保9年以降の教祖のみちすがらを「ひながた」という。
	6	・嘉永6年 ・をびやゆるし ・貧の谷底 ・たすけの道明け *第4章「つとめ場所」 ・つとめ場所のふしん ・大和神社のふし	・「ふし」の意味を確認する。 ・「ぢばの理」(教えの根本)	・人間創造の親としての「たすけ」である。 ・「貧に落ち切った」ところに、初めて見えてくる親神様のご守護。 ・親神様によるお引き寄せ。素直な信仰心。「さづけ」→「道の路金」 *飯降伊蔵様の入信(「大工が出てくる、――。」)→ご守護に対する喜び、お礼の心(心のふしん)→つとめ場所のふしん(形のふしん) ・「ふしん」による勇んだ心→教祖のお言葉を素直に通る→「ふし」に直面→「神一条の精神」(ひのきしん)→「ふしん」の完成(心のふしん) ・「助道事件」に対する教祖のご態度→内に対する厳しいお姿。	・「心の明るさ」=「陽気ぐらし」 ・親神様にもたれ切る心。 ・「貧に落ち切れ」の意味の確認。 ・「ようばく」の心と使命。 *「ふしん」の意味と「つとめ場所」の意義。 ・「ひのきしん」の態度 ・「ぢばの理」の確認。
	7	・反対攻撃と邪説			

	月	学習単元・項目	学習のねらい	具体的な学習内容と方法	評価のポイント
二 学 期	9	*第5章「たすけづとめ」 ・つとめの理 ・神祇管領への公認 *第6章「ちば定め」 ・おふでさきご執筆 ・つとめの急込み ・高山たすけ ・「月日」の働き ・ちば定め	*「みかぐらうた」の特色や作成の背景を学び、「つとめの理」を明確に理解する。 ・「つとめの実施」→神一条の心 *「おふでさき」の台となっている出来事を辿り、「つとめ」と関連していることを知る。また、高山たすけを宣言され、その第1歩を踏み出されたのが教祖自身であった事を確認 ・世界たすけの実現に欠くことの出来ない「元のちば」である。 ・どこまでも神一条であること。 ・人間創造の親である親神様の思召	*「かぐら」と「てをどり」にこもる教祖の思い。 ・「理の歌や」「理を振るのや」 ・「吉田家も偉いようなれども、一の枝の如きものや。枯れる時ある。」 *「みかぐらうた」ご作成年代と、「おふでさき」ご執筆年代。 ・秀司様の結婚→「つとめ人衆」の引き寄せ・神一条の心。 ・「かぐらつとめ」の支度→「かんろだいの雛型」、「かぐら面」 ・「大和神社のふし」、「山村御殿のふし」→「奈良中教院」から呼び出し ・「赤衣」、「証拠守り」、「さづけ」→世界たすけの実現へ。 ・「ちば定め」の方法・教祖より言葉を頂く→人々が素直にそのまま実行→人間創造の「元のちば」をお教え頂く。 ・こかん様の出直し→人間思案の心 ・「いちれつきようだい」、「かしもの・かりもの」	*「つとめ」の意味と教祖の思い。 ・「元の理」の理解。 ・「つとめ」に対する反対・攻撃。 *「おふでさき」を誌される親心と、「つとめ」によるたすけの実現。 ・1日も早く世界たすけを待ち望まれる思い。 ・今現在の教祖のご守護を確認。 ・教祖を信じて通ることがたすけの元であること。 ・親神様の思召しが何であるのか。 ・「かしもの・かりもの」の自覚。
	10	・つとめ人衆への仕込み ・いちれつきようだい *第7章「ふしから芽が出る」 ・「講を結べ」 ・転輪王講社 ・かんろだいの石普請	*教祖が求められた「講」と、秀司様が結講した「転輪王講社」との違いはどこにあるのか。かんろだいの石普請と、その頓座の意味を知る。	*「ふしから芽が出る」と仰せられる意味。(当時のおやしきの様子から) ・「講」＝信仰する者が、お互いの心一つにして「おつとめ」をつとめて更に信心を深めるもの。 ・「陽気ぐらし世界実現」を目指される教祖の思召し。	*「ふし」＝より一層成人した姿へと お導き下さるもの。 ・現在の教会との違い。 ・「ふしん」の意味とひのきしん。
	11	*第9章「御苦労」 ・かんろだいの石取り払い ・毎日つとめ ・雨をづとめ ・教会公認運動 ・最後の御苦労 *第10章「扉ひらいて」 ・世界の動くし ・「月日がありてこの世界あり」 ・「扉ひらいて」	*「御苦労」を通して教祖が先頭に立って「つとめ」を急込まれた反面、御高齡の教祖を思う一念から応法の道(教会公認)を急ぐ子供達の姿を知る。 ・「ひながたの親」の確認 *ご自身の身上にしろしを見せて「つとめ」を急込まれる教祖の「おさしづ」を通して、当時の人々が命懸けの「つとめ」にとりかかった、明治20年陰暦正月26日を考える。	*当時の歴史的状況(明治政府の宗教政策)にも言及して、教祖の御苦労を間近に道を歩まれた側近の方々の苦悩と、人々を神一条の心へとお導き下さる教祖の親心。 ・親神様の自由自在のご守護→「雨降るも神、降らぬも神の自由」 ・神道本局へ提出した「5箇条の御請書」←「ひながたの道を通らねばひながた要らん」 *刻々とお出し下さる「おさしづ」によって伝えられる「親の思い」に、何とかお応えしたいと思う反面、教祖のお身上を氣遣う人々の思い。 ・「律ありても心定めが第一やで」→「つとめ」を実施。 ・親の思いに添い切る(神一条の心)→世界たすけの働きが始まる。 ・「つとめ」と「さづけ」によるたすけの実現。	*どこまでも神一条の心を求められる教祖→たすけの実現 ・神一条の心→人間思案の姿を一掃 ・「つとめ」＝よろづたすけ ・明治政府の宗教政策の理解。 ・教祖の親心(世界いちれつの親) *教祖のお身上＝「つとめ」の急込み→教祖の御苦労 ・世界の成り立ちの順序 ・「子供可愛い故」(親心) ・「教祖存命の理」の認識
	12	・教祖存命の理 *三年間のまとめ	*卒業する生徒たちへよふぼくとしてこれだけは心に持っていてほしい心構え等、三年間で学ばせていただいた教えをもう一度振り返る	*おさづけの理拝戴後の心構えやおさづけの取次ぎ、また人々をたすけることの実践の促し等。 三年間教義を学んでこれだけは覚えてほしい事を復習する。	*人々をたすけることの実践や決意表明。
	1				
	2				

その他 (履修上の留意点)

教祖の「ひながた」こそ、この教えを信仰する者の歩むべき道である。従って、私たちは常に教祖と身近に接して日々を通らせて頂かねばならない。将来の「ようぼく」として一歩でも教祖のお心に近づくことが出来るよう、そして「ひながた」を実践出来るよう心掛けてもらいたい。